

哲學研究

第六十九號

第六卷
第十二冊

カントに於ける認識客觀性の問題（承前）

岡野留次郎

三

一及二に於てカントが認識客觀性の確立に於て取つた第一歩は形而上的演繹であり、そしてそれは具象的な最も直接的な意識其者の先驗心理學的分析と解し得ること、尙又かゝる分析の結果、認識客觀性の基く根據として、時空の直觀形式並に範疇の悟性形式、及之等に對立するものとしての認識の素材を、先天的要素として發見し得ることを述べた。然るに、更に進んで、之等の先天的要素の先天性の基く最終の根據を明にし、其權利の基礎を確立することが必要である。之即カントが認識客觀性の確立に於て取つた第二歩であり、先驗的演繹（Transcendentale Deduktion）の段階であ

つて、カントが純粹理性批判に於て成遂げた最大なる認識論への寄與は、一にかゝつて此論究にあると云つても差支はあるまい。従つてカント自も之を以て批判の最も重要な部分であり、其最大の努力を惜しまなかつた所であることを述べて居る。

(K. d. r. V. s. 8)

扱て形而上的演繹に於て、具象的な意識其者を先驗心理學的に分析して先天的要素を發見し得たのであるが、かゝることが可能なる所以は抑も何に基くのであらうか。其可能は却つて先驗的演繹を俟つて初めて保證せられるのではあるまいか。先驗心理學的が個人心理學的と其 *Verfahrungsweise* を異にするは、全く其根底に先驗的演繹を豫想するが爲と思はれる。演繹の眞の意義は先驗的演繹に至つて初めて完全に現はれる。形而上的演繹は要するに先驗的演繹の豫備段階と考へねばならない。

然らばカントに於て先驗的演繹とは如何なる意味を有するか。カントが權利問題 (*quid juris*) と事實問題 (*quid facti*) とを峻別し認識論に於て價值批判の道を開いたことは今事新しく説く迄もない。併しながら之應てカント認識論の輻軸をなすものであるが故に、我々の論究は先づ此點から初められなければならない。カント自ら

説明して居るやうに演繹とは本來法律上の言葉である。事實問題ではなく權利問題に關する。die Frage über das, was Rechts ist (s. 103) に關する。此意味を認識論に轉用すれば、認識の事實或は發生の問題でなく、認識可能の根據の論究を演繹と呼ぶねばならない。普遍妥當的な認識の存在は事實が之を示してゐる。認識論の問題は、如何にしてそれが可能なるかの根據基礎の論究でなければならぬ。而してそれは應て形而上的演繹に於て發見し得た先天的要素の有する先天性の基く根據を明にすることであり、如何なる權利を以て其先天性を主張し得るかの鮮明でなければならぬ。夫故にカントは先づ先天的演繹を定義して Ich meine daher die Erklärung der Art, wie sich Begriffe a priori auf Gegenstände beziehen, die transcendente Deduktion derselben. (s. 104) と云ふ。此處にカントが概念と名けてゐるのは、時空並に範疇を指す。先天的要素は、對象と關係し得て初めて其先天性の權利を主張し得るのである。かゝる先天的演繹は、之を経験的演繹(empirische Deduktion)と區別することに依つて、一層其意義を明にし得る。經驗的演繹とは、或概念が如何にして、經驗を通じ又經驗の反省を通じて、獲得せらるゝに至るか、の仕方を説明するに過ぎない。換言すれば認識の合法性を取扱ふものでなく、其發生の事實を取扱ふものである。經驗論者のなした所

は凡べて之であつた。

即彼等は經驗から概念を導き出すと共に、其先天性の根據を經驗から概念を導き出す仕方に基き様としたのであつて、かくては到底認識の客觀性を確立する事が出來ない。例へば因果なる概念を經驗から導き出し、其先天性の根據を經驗的の聯合の法則に基けたのでは、主觀的必然性を之に附與し得るにしても、客觀的必然性を附與し得ないことは當然と云はなければならぬ (Prot. s. 32; K. d. r. V. s. 104, 108, 111)。先驗的演繹はかく先天的要素の先天性の基く根據の解明であり、之聽て、かゝる要素が如何にして對象と關係するか、の論究であるが、此目的を達する爲に、如何なる方法に依るべきかに就て、先づ大體の方針を立てることが必要である。云ひ換へれば先驗的演繹の根本意義根本精神は既に明にし得たのであるが、更に進んで今少し内容に迄立入つて精密に規定することが必要で有らう。

凡そ認識を以て何等かの意味に於て、表象と對象との一致を意味するものとすれば認識可能の論究は、二つの方途に於て求められる。即一は對象が表象を可能にする場合、他は表象が對象を可能にする場合である。前者は表象が對象の模寫と見る見方であつて、後者は表象が對象を構成すると見る見解である。カントが此處に對

象と云ひ、表象と名けて居る當のものが、經驗心理學の見地の下に解されて居ることは云ふ迄もない。對象が意識と離れ、カントの所謂表象力 (Vorstellungskraft) を超越するものとして考へられる限りは、即素朴的な超越的實在を内界或は外界に立する限りは、かやうな對象が表象力に影響を及すことに依つて生ずると見らるゝ認識が、必然的に後天的經驗的 (empirisch) であつて、客觀性を有しないのは勿論である。之に反して表象が今述べたやうな意味の對象を可能にすると見れば如何。此場合には明に表象は對象を其存在の上から (dem Dasein nach) 之を可能にするとは出來ない。何者個人心理學的の意識に従屬する表象が、之を超越する實在の世界を其存在の上からも可能にするを云ふとは、明にバークレー一派の個人的觀念論に墮する所以であり、迷妄論 (Illusionismus) に陥るより外はなく、カントの極力排斥した所に外ならないからである。即此場合は對象を認識の上より (etwas als Gegenstand zu erkennen) 可能にすると云はねばならない。此方途を取つたのが即カントである。コペルニクスの轉回はかくして成遂げられた。此處に於ては一般に認識の對象とは如何なる意味か、認識主觀とは如何に、果た又兩者の關係如何が明にせられ認識客觀性の基く根本が闡明せられる。然るに、カントに依れば、意識を超越し、經驗界を超越した物自體は、遂

に不可認識であつて、認識の對象は凡べて現象の世界であり、或は更に精密に云へば、可能的經驗の世界である。かゝる對象界は意識を超越せず、却つて意識に依つて可能なる世界である。故にかゝる世界の可能なる爲の條件は、直觀と概念の二つである。云はねばならない。今若し時空の直觀形式に依つて一般に對象が與へられ、之に依らないでは一般に現象としての對象が成立しないことを論證し得るならば、時空が對象成立の先驗的根據たることが明にせられやう。又之と同じく、範疇に依つてのみ一般に對象が考へられ、之に依らないでは一般に思惟の對象が立せられない理由を明にすれば、範疇の先驗性の基礎は明にせられる筈である。然るにカントに依れば、凡そ認識の對象とは、可能的經驗の對象を意味し、時空の純粹直觀によりて與へられ、範疇なる悟性概念によりて考へられ、初めて成立するものである。故に時空及範疇が、可能的經驗成立の先天的條件なることを明にすることが、之等先天的要素の先天性が基く根據を明にする所以であり、之聽て其先驗的演繹でなければならぬ。

(Die transcendente Deduktion aller Begriffe a priori hat also ein Principium, worauf die ganze Nachforschung gerichtet werden muss, nämlich dieses: dass sie als Bedingungen a priori der Möglichkeit der Erfahrungen erkannt werden müssen (es sei der Anschauung, die in ihr angetroffen

wird, oder des Denkens). s. 110).

此に於て、先驗的演繹の大體の方針は決定した。今や我々は進んで、凡そ認識の對象とは一般に何を意味するか、認識主觀とは如何、果た又此兩者の關係如何を明にし、時空並に範疇が如何にして可能的經驗成立の先天的條件たり得るか、の根據を論究しなければならぬ。之應て認識客觀性の基く最高根據の究明であり、先天的要素の先天性の基く意味其者の本質の闡明であると共に、經驗界の對象性の基く最深の基礎の論究である。認識論の中心問題はこゝに存すると云はなければならぬ。

扱てカントは此問題を如何に取扱つたかと云ふに、第一版に於ては、先づ現實の個人的意識作用の分析から出發して居る。併し固より此場合に於ても經驗心理學的にではない。飽くまで先驗心理學的にである。カントの言葉を借れば其 empirische Beschaffenheiten でなく transcendente Beschaffenheiten に依つて考察する。今意識を主として其内面的本質に就きて考察する時は、三つの綜合作用に區別して考へることが出來やう。即 (1) die Synthesis des Mannigfaltigen a priori durch den Sinn. (2) Die Synthesis dieses Mannigfaltigen durch die Einbildungskraft. (3) die Einheit dieser Synthesis durch ursprüngliche Apperzeption. カントは即之等の意識の三根本作用を論究し、經驗可能の最高根據

を明にせんとしたのである。

四

先づ直觀に於ける雜多に Synthesis が存することは、Receptivität が單なる Receptivität でなく、其根底に Spontaneität を豫想することを示すものではないか。Receptivität は Spontaneität を俟つて初めて認識を可能ならしめるのであつて之懸て綜合作用の根底に外ならぬと考へれば、直觀の雜多に現はるゝ Synthesis は、自發性の方面から見て之を「直觀に於ける覺知の綜合」(die Synthesis der Apprehension in der Anschauung)と名け得る。今此綜合作用に就て考察するに、凡べて直觀は其中に雜多を含む。しかも其雜多が或一瞬間に綜合せられ、統一せられて居ることが必要である。時間空間の直觀が成立つ爲には、das Durchlaufen der Mannigfaltigkeit 及び die Zusammenhang der Mannigfaltigkeit とがなければならぬ。此作用を覺知の綜合と云ふ。勿論こは經驗心理學的の心的過程を指すのではない。却つて夫等の根底となる知識成立の條件としての綜合作用を意味する。更に進んで想像力に依る雜多の綜合とは、カントが又「想像に於ける再生の綜合」(die Synthesis der Reproduktion in der Einbildung)とも呼んで居るもの

であつて、凡そ認識の可能なる爲には、此綜合作用を根底に許さなければならぬ。既に時空の直観綜合に於てすら、其根底に此再生の綜合作用を豫想すると云はねばならぬであらう。固より之は單なる主観的な想像作用とか、聯想作用とか云ふものを指すのではない。却つて夫等の作用の根本に存する認識論的豫想である。transcendentale Handlung des Gemüths (S. 117)に屬する。然るに覺知せられ、再生せられた所の雜多も最後に統一した全體を形づくると云ふとがなければ、對象の意識は成立しないであらう。之カントが「概念に於ける再認の綜合」die Synthesis der Recognition im Begriffeと名けて居るもので、認識成立の根本たる綜合作用である。例へば數の意識に於ても、個々の要素が覺知せられ、再生せられ、綜合せられるにしても、それが我の意識に屬するものとして統一せられて初めて成立する。此綜合作用に至つて、初めて、認識の對象とは一般に何を意味するか、の鮮明の鍵鑰を得たのである。

對象が表象力を超越したものととして見られないならば、認識に對立し、しかも之と異ると見られる對象とは抑々何を意味するのであらうか。こは經驗的個人的意識を超越した外物を指すのではない。従つて先づ etwas überhaupt \times と考へられなければならぬ。併し \times は單なる無ではない。凡そ認識が對象に關係すると云ふとは、

認識に必然性を生せしむる所以である。故に對象とは、認識が勝手氣儘な雜多の集合でなく、或種の先天的規定性を帶ぶるものであることを保證する當のものとして解されなければならない。換言すれば、認識は、對象に關係することに依つて其必然性を獲得し來るのであつて、しかもこの必然性は意識の統一の仕方に基いて居るとすれば、逆に意識の統一其者こそ、對象の概念を作るものと云はねばなるまいであらう。

即對象とは、一般に、雜多なる表象に於ける意識の形式的統一 (die formale Einheit des Bewusstseins in der Synthesis des Mannigfaltigen der Vorstellungen s. 119) に對立した概念であると云ひ得る。或は直觀の雜多の中に綜合的統一を作り出した時に、一般に對象を認識することも云へるであらう。

此處に於て我々はカントに於ける認識客觀性の基く最高根據に到達した。即一切の意識の統一作用の先驗的根據として、又有ゆる對象性の基く根據として、根源的な、先驗統覺 (transcendentale Apperzeption) を認めなければならぬ。こは固より經驗心理學的の統覺作用ではない。却つて夫等凡ての基く根底である。之は凡べての經驗より先ち、却つて之を可能ならしむるものである。(Es muss eine Bedingung sein, die vor aller Erfahrung vorhergehen und diese selbst möglich machen, welche eine solche transcendente

Voraussetzung, geltend machen soll. (s. 121.) 此は番に概念のみでなく、直観の根底にも横はる。經驗可能の最高の Grund である。之を主観の側より見れば、有ゆる意識作用の基く根底であり、之を客観の側より見れば、有ゆる對象の基く根底であつて、此意味に於て又 transcendentaler Gegenstand と云つてもよいであらう。(Cohen, Kants Theorie der Erfahrung. S. 395)。

以上カントの叙述に従つて意識作用の中に立つの綜合作用を區別し、最後に先驗統覺の綜合的統一作用に至つて、經驗成立の最高根據を見出したのであるが、此は經驗的時間的順序より云へば、最も後に意識せらるゝにしても、價値の順序より見て、先づ第一に認められなければならない認識成立の根本假定である。カントは此價値の順序を明にし、他の誤解を避ける爲に、第二版に於ては全然書き改め、先づ Ein Aktus der Spontaneität der Vorstellungskraft (s. 658). としての Verbindung (conjunctio) から出發した。こは即 synthetische Einheit des Mannigfaltigen である。凡べての意識をして我の意識たらしめる所のもの、經驗的統覺作用でなく、純粹統覺作用である。又凡ての表象の根本に存するものであるから、根源的統覺とも呼ばれ、更にこは凡ての認識可能の先驗的根據として、自覺の先驗統一 (Transcendentale Einheit des Selbstbewusstseins) とも又有ゆる

意識の根底なるが故に、意識一般とも名けられる。

五

以上述べた所で明な如く、カントの意識一般の教説には、Mark も云ふ様に、純粹先驗主義 (reiner Transzendentalismus) の傾向と主觀主義 (Subjektivismus) の傾合とが相融合せられてゐると見られるであらう。(Mark, Die Lehre vom erkennenden Subjekt in der Marburger Schule, Logos Bd. IV, s. 365) 認識の普遍妥當必然性の根據が、同時に認識主觀の中に含まれる。主觀は自發性として、論理的價値の根據即對象性の根底であると共に、自己の中に對象を立する所の作用である。然るに作用の中に論理的價値を見出すことは價値の純粹性を毀損することも考へられるであらう。かくして論理的價値を認識對象性の根據として、有ゆる存在より前に、存在を越へて先行せしめ、意識一般を超越した純粹妥當の世界に迄高め上げたものは、即リッケルトである。従つてリッケルトに於ては、意識一般は單なる限界概念となり、意識内容の一般的存在の仕方を意味する概念に外ならぬものとなり了る。此點に於て正しくカントの繼承者と目すべきはヘルマン、コーエンであらう。彼の思想の源泉はカントの先驗的方

法である。これは主観と客観の相関 (Korrelation) に現はれる。純粹思惟は創造的作
用として、雑多の綜合的統一である。(Natorp, Kant und die Marburger Schule. s. 3ff.)

然るにカントに於ては、先驗統覺は自發性として、對象の基く最終の根底であるに
しても、對象を其内容の上よりも可能にするとは出来ない。直觀の雑多は必ず與へ
られねばならない。感性の受納性を通じて與へられた認識の素材の上に、初めて其
力を發揮すると云はなければならぬ。既に述べたやうに直觀に於ける覺知の綜合
にすら既に根底に自發性が働いて居るとすれば、感性をして、受納性たらしめる最終
の基礎は、認識の素材でなければならぬ。然し乍らかやうな認識の質料が、認識を離
れて既に假定された超越的實在の感觸に依つて與へられると解するところが到底許さ
れないとすれば、認識の純内容としての非合理性は、認識論に於て如何に取り扱ふべ
きであるか。一體與へられたものとは、與へられたものとして判斷されたものでな
ければならぬ。既に所與の根底には所與性の範疇を豫想して居るとも考へられる
でもあらう。之カントに於ける純先驗主義を徹底せしめ、先驗的 (das Transcendentale)
を絶對妥當的論理的價值に迄高め、主客對立の範圍領域を超越せしめたり、ケルト
一派の形式主義の先驗哲學が取るべき解決の仕方である。此處に於ては只々形式

のみが認識論の問題となる。純内容としての非合理性は全然認識論上無意味のも
のとして排斥せられるのである。併し乍ら、作用を超越した對象が、如何にして作用
に内在するに至るで有らうか。單なる極限概念に過ぎない意識一般に、如何にして
對象を把握する作用性を附與し得るで有らうか。此難點に逢著する時は必ずしも、
カントの主觀主義的見解を退くべきでもないかに思はれる。即靜的な自己自身の
中に絶對的に安住する價值は、作用其者の中に融解せられねばないではないから
うか。併しかうして作用と關係することに依つて、價值は其絶對性を毀損する憂は
ないか。價值を作用と關係せしめつゝ、しかも、價值の絶對性を損毀せず、批判の限界
を破らずして、しかも價值を作用の中に融解せんが爲には、深甚なる注意と精細なる
工夫とが閑却されてはならない。コーエンに於て我々はかゝる注意とかゝる工夫
とが遺憾なく發露されて居るのを見る。此處に於ては嚴密なる論理が、深き形而上
的要求に動かされながら、批判の限界——それは近づけば近く程限りなく彼方に退くも
のであるが——を目睹しつゝ、無限に發展し行くのである。思惟は自發性として、自己
自身の中より内容を作り出す。一體純粹思惟は又同時に純粹直觀なのである。思
惟は只自己自身の要求に従つて發展し行くと考へられるであらう。思惟に對して

外的な friend のものを附加するは、思惟の獨立性自發性を害する所以である。與へられるとは問題として與へられると云ふ意味でなければならぬ。併し乍らかく解せられた認識の内容なるものは、要するに一つの形式ではないか。 Mannigfaltigkeit であつても Das Mannigfaltige ではあるまい。非合理性とは更に高き段階から見ても合理化するものとしての、低き段階に於ける合理性に過ぎない。 Naturp. も云ふ様に此場合解せられた非合理性とは、主として theoretisch である。認識が die unendliche nie abgeschlossene od. abschliessbare Prozess des Denkens, d. i. der Bestimmung des Unbestimmten であることを示す概念に外ならない。思惟が逢著し衝突するが如き思惟に對立した堅固な牆壁ではない。それは Ratio の *letztes* として Ratio の相關概念として、即ち認識せられ合理化せらるゝ問題として與へられ、眞に永遠に只々問題として残り、如何に合理化するも尙合理化し盡し得ない X としての非合理性である。(Naturp., op. cit. s. 14ff.). 認識を無限なる課題と考へ思惟は自己自身の中より内容を作り出すと考へるマールブルヒ派の考からすれば、普遍者としてのロゴス其物が自己自身を制限し、自己自身を具體化し、豊富なる規定性 (volle Bestimmtheit) を有し來ると考へるのであつて、かゝる普遍者夫自身の根本の姿は Ursatz として Ursprung として現はれ、し

かもこの根源とは、方法の方法として、動的發展をなす價值其者に外ならない。價値の動的發展が認識の過程であり、この過程其者が又直に科學的認識の成果なのである。フーエンが *Die Erzeugung selbst ist das Erzeugnis. (Logik der reinen Erkenntnis 2. A, s. 22)* と云ふのは此意味であらう。科學的認識の成果は、通常、概念の形で現はされると云ひ得る。何者法則も結局概念に過ぎないからである。而して概念が判断とも見られ、判断の結果が概念の形に結晶することも云はれ得るが、併しそれは固定した儘動かないやうなものではなくて、絶えず判断の中に融解されながら、其内容を豊富にし、其結晶の形を増大するものと考へられねばならないであらう。概念は決して死物ではない。之フーエンが、思惟が思惟自身の中より内容を作り出すと解する理由と思はれる。

併し乍ら翻つて考へるに、概念が單なる死物でなく生きたる過程であり、自己自身の中より内容を無限に造り出すと云ふ事は、如何にして可能で有らうか。思惟が綜合的統一であり、ナトルプの云ふやうに *die Methode als die Bewegende, die vorwärtsstreibende, die schöpferische Kraft der Gedankenbildungen* たり得ることは、如何にして可能であらうか。認識主觀としての意識一般が *Akt* として *Handlung* として、自發性たり得る所

以は Logos 其者の背後に das Unmittelbare を許容することに依つて初めて可能なのではなからうか。否 Logos 其物が其背後に存する具體的普遍者の一面的顯現としてのみ解し得られるのではあるまいか。認識の過程が無限なる課題とあり得るは、全く背後に存する具體的普遍者の要求に基くが故である。綜合的統一は、カントも云ふ様に單なる統一ではない。(s. 630)。綜合は雜多を豫想する。そは單なる綜合的統一でなくして、雜多の綜合的統一と考へられねばならない。具體的普遍者は只々其雜多の面に即して見んか、非合理性として直接的として見られるのであらう。之に反して綜合的統一に即して見んか Logos の法則として認識客觀性の基く價值其者である。かやうな價值は最早意識一般に超越せるものとしては見られない。只々具體的普遍者の内面的必然性の顯現に過ぎないと見なければならぬ。かくてこそ價值其物に動的發展の意味を有せしむる理由を理解し得るのではあるまいか。而して價值其物が動的に發展し行くこと云ふことは、懸て具體的普遍者が自己の姿を益々深く認識の鏡に映し出すことであり、自己自身に深く還ることであり、又同時に對象の奥深く進入することに外ならないのである。具體的普遍者がかく自らを認識對象界に顯現し行く過程は無限なるが故に、認識の過程は無限なる課題として現は

れる。

カントの先驗的自我をかくの如く解せんとするは、批判主義を越へての *Hinausgehen* であると考へられるかも知れない。併し固より舊き形而上學への復歸ではなくして、批判主義の牆内に於ての新なる形而上學への *Hinaussteigen* である。此登攀には種々の困難と荆棘とを伴ふで有らう。das *Umfeld*ure を窃かに精緻なる論理の網を潜つて忍入らしめる暴擧を批難せられるかも知れない。併しながらカントの物自體をかくの如く解しないならば、果して如何にして其思惟動機を矛盾なく解し得るであらうか。我々としてナトルプの所謂 *starre Wand* としての質料従つて其質料の原因としての物自體を認めんとするのではない。否却つてナトルプやコーエンの立場が、尙何等かの意味に於て *starre Wand* を豫想して居ると考へねばならぬのではないか。既に *Methode* を云ふ。Methode の根本思想はカントの *die veränderte Methode der Denkungsart, dass wir nämlich von den Dingen nur das a priori erkennen, was wir selbst in sie legen.* (s. 18) に發することは、コーエンが其著 *カント經驗理説* に於て屢々高潮するを見て明である (s. 139 n. a.) 既に *hineinlegen* と云ふ。hineinlegen せらるべきものを暗に許容するのではあるまいか。固よりこは單なる問題であり思惟の *Bestimmtheit*

を unendliche Bestimmbarkeit として現はす Fragezeichen であると主張するのであるが、思惟に對してかくの如き意義を有せしめ得るものは、思惟に對立するものとしての直接的でなくて何者であらう。固よりこは合理化し盡されたものとしては考へられまい。其意味に於て永遠の課題 X である。こは理性の限界に位屬し、しかも其限界たるや、永遠に到達し得ないと云ふ意味に於て、或は近づくに従つて益々遠ざかると云ふ意味に於て starre Wand ではあるまい。併し思惟に對立したもものとして、彼岸に認められると云ふ意味に於て、或意味の Wand を默認するものではあるまいか。寧ろ思惟の半面に直觀を認め、Logos の半面に das Unmittelbare を認めることに依つて、認識の基く價值其者の根據を更に最も具體的なる普遍者に基けることに依つて、認識の意義を尙一層徹底的に理解し得るのではあるまいか。 *so + ist so* を以て、我の根柢たる超個人的自我と認め、之纏てカントの物自體に外ならぬと解し、認識並に實在の基く最高の根據と考へ初めて認識の過程の無限性を理解し得るのではあるまいか。固よりかくの如き意味の我の統一、自覺の統一は經驗心理學的の我ではない。素朴實在論の假定するが如き、従つて批判主義の絶對に排斥せんとするが如き物自體でもない。ナトルプの云ふが如き starre Wand では固よりない。そは實に schöpferische Tat

である。Handlungである。自發性である。自己の先驗的統一である。雑多の統一である。ベルグソンの意味に於て、空間を内含する時間である。

かやうな立場から見て最初問題として残して置いた認識の質料の意義を更に論究し進んで先驗的演繹の終末に急ぎたいと思ふ。